

2014.5.17



“ト短調の世界” — ト短調の名曲を探る



プログラム

今日は“調性”を特集するシリーズの第2回として、ト短調で書かれた名曲を集めてお聴きいただきます。バッハの小フーガは短い曲ながら、快活なリズムと流れるような美しい旋律で広く親しまれている名曲です。ブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番はヴァイオリンの美しさ、華やかな技巧、充実した管弦楽と3拍子揃った傑作で、名手ヨアヒムに捧げられました。ブラームスのピアノ四重奏曲第1番は、28歳の時に完成させた作品で、ほの暗い情感の漂う第1楽章から開放感溢れる情熱的な「ジプシー風ロンド」の第4楽章まで、ピアノと弦のバランス感覚も見事な佳曲です。シェーンベルクはこの作品を大変好んでいましたが、良い演奏に恵まれない不遇な作品だとして、自ら管弦楽版に編曲し、この曲の魅力を引き出そうとしました。今日では管弦楽版の方が、演奏会で取り上げられる機会も多くなっています。ショパンのバラード第1番は、ドラマティックな曲想に劇的なコーダを持つショパンの代表的な名曲の一つ。サン=サーンスのピアノ協奏曲第2番は華やかに繰り広げられるピアノの名人芸、スリリングなオーケストラとの掛け合いも見事な、ロマン派ピアノ協奏曲の代表的な傑作です。カリンニコフは、マーラー、リヒャルト・シュトラウス、シベリウス等と同世代の作曲家で、交響曲第1番は29歳の時の作品。メランコリックな美しい旋律、民族色漂う力強い響きは魅力に溢れていて、ロシアの交響曲を代表する名作です。今日はト短調の名曲をたっぷりお聴きください。

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):

フーガト短調“小フーガ” BWV578

ヘルムート・ヴァルヒヤ (オルガン)

(1970年録音 アルヒーフ盤)

マックス・ブルッフ (1838~1920):

ヴァイオリン協奏曲第1番ト短調op.26 ~第1楽章、第2楽章から、第3楽章から

イツァーク・パールマン (ヴァイオリン)

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1979.11.10 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

ピアノ四重奏曲第1番ト短調op.25 ~第1楽章から、第4楽章から

エミール・ギレリス (ピアノ) / アマデウス弦楽四重奏団

(1975.9.2 ヘルシンキ、フィンランディアホールでのLive)

ピアノ四重奏曲第1番ト短調op.25 (シェーンベルク管弦楽編曲版) ~抜粋

クリストフ・エツシエンバッハ指揮フランクフルト放送交響楽団

(1997.3.18 フランクフルト、アルテオパーでのLive)

*** 休憩 ***

フレデリック・ショパン (1810~1849):

バラード第1番ト短調op.23

ベラ・ダヴィドヴィチ (ピアノ)

(1999.1.30 王子ホールでのLive)

カミーユ・サン=サーンス (1835~1921):

ピアノ協奏曲第2番ト短調op.22 ~第1楽章、第3楽章

イエフム・ブロンフマン (ピアノ)

クルト・サンデル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1992.6.7 ベルリン、フィルハーモニーホールでのLive)

ヴァシリー・カリンニコフ (1866~1901):

交響曲第1番ト短調 ~第1楽章、第2楽章から、第4楽章

エフゲニー・スヴェトラーノフ指揮NHK交響楽団

(1993.2.3 NHKホールでのLive)